

正徹『法のむしろ』（同志社大学文化情報学部蔵）影印と翻刻・解題

福田 智子

一 はじめに

正徹の『草根集』（書陵部蔵五一〇・二八）（以下、書陵部本と呼ぶ。）一六〇四・一六〇五番には、北野の松梅院の女性との次のような贈答歌が載る。詠まれたのは、永享二年（一四三〇）十月のことであった。

十九日、北野、御経結願ちやうもむし侍に、雨ふりて
松梅院にと、まり侍る、廿日朝なをやます侍しに、女
かたより申されし

けふは猶しくれもいたく降そひて日影もらすな空の浮雲
返し

しくれにもしられにけりなふりいて、行方みえずとまる心^①

これはちやうど、正徹五十歳の年にあたる。この贈答の後、正

徹は引き続き、かの女性に自らの感懐を書き送っている。

御経はて、の朝、内野、かたへいて、みくらして、御
堂のかたはらにた、すみ侍しに、昨日のなこりなく、人
もかよはぬ野へとなり侍るほど、あはれにおほえて、た
ちかへりふてにまかせて、かの女かたへつかはし侍る

これ以降の『草根集』一六〇六〜一六一五番は、とくに『法の
むしろ』と称され、後世、それ単独で読まれたこともあったよ
うである。呼称の所以は、『草根集』のこの部分の直後、
一六一六・一六一七番の贈答歌の詞書に見出される。

かやうにしるして、うはかきに法のむしろとかきて
（傍線筆者。以下同じ。）、かの女かたへつかはし侍れ
は、そのつかひに申をくられ侍る

いかはかり神もみるらん数く〜に君かこと葉の法のひかりを返し

神は猶あはれとやみむ法のためた、かきすつるもくつつなりとて

すなわち、正徹自身が、この部分を「法のむしろ」と上書きして、かの女性に送ったという。

『法のむしろ』は、『扶桑拾葉集』に収められる本文（以下、扶桑拾葉集所収本と呼ぶ。）の他、鳥根大学付属図書館蔵桑原文庫にも存することが報告されている²⁾。本稿では、諸先学の驥尾に付し、同志社大学文化情報学部が所蔵する一本（以下、同志社本と呼ぶ。）を新たに紹介したい。

なお、同志社本は、同志社大学図書館学術情報検索システム DOORS には、『草根集』(911.148 || S9300) として登録されている²⁾。

二 書誌

同志社本は、卷子装一軸の写本。木箱入り。紙高二五・九センチ、長さ一メートル一四センチ。見返しには金銀箔と草花の彩色が施され、巻末には「招月菴徹書記筆」の押紙に「琴山」の

極印を見出す。虫喰があり、部分的に裏打ち補修がなされている。古筆極札（縦一四・七糎、横二・二糎）が付いており、表には「徹書記真蹟朝乃雲（辨物正言）の極印」、裏には「巻物歌十首了佐極アリ（温故知新）印、「淡水」印」と記され、また、極札の包紙（縦二七・二糎、横三八・六糎）の表書きには「徹書記巻物鑑定」とある。

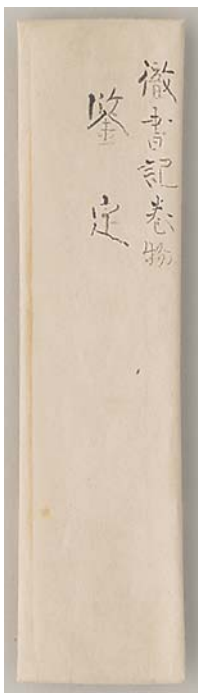
極札（表）



極札（裏）



極札の包紙

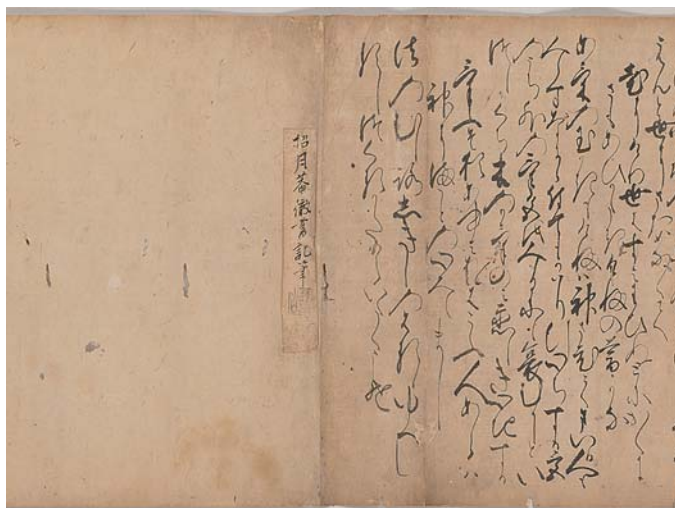


三 影印と翻刻

本節では、まず同志社本の影印を挙げ、その後に翻刻を記す。卷子本のため、影印の継目には数行の重複が存する。翻刻本文は、底本の原態を尊重して改行や字下げはそのままとするが、漢字・仮名ともに通行の字体を用い、適宜、読点を施す。また、行頭に行数の通し番号を付す。

【影印】





【翻刻】

- (1) 朝の雲夕の雨を詠し人も、今は昔の夢と
 (2) なり、花の春紅葉の秋にこゝろをよせし類、
 (3) いづれかまほろしのほとならさりし、あさきり
 (4) とともにたちいて、みるに、夜のまの庭の
 (5) あとかたなき、千百人とかやなみいたりし御たう
 (6) は、いつしかあらしにちりをはらひ、数しらすなむ女
 (7) たちこみたりし野へも、朝しもふかき草
 (8) のはらはかりなり、昨日はさかへけふはおとろへ、
 (9) あふはわかれ、生るゝは死する事、もとよりさた
 (10) まれる世のならひも、今更おとろかるゝ心ちして、
 (11) 老の袂をしほり侍にも、三十年あまり
 (12) にや、このきやうにえむをむすひたてまつり
 (13) し、いかなるゆへにかとおほえて、なをひとり
 (14) たゝすまれ侍に、松の嵐はけしく吹くるに、
 (15) 森の木のはのみたれて人かけもせず
 (16) けふみれは松の木のはのちりくゝに
 (17) なりて人なき野への冬かれ
 (18) 日比み、なれぬる御経の聲はるに猶きく
 (19) こゝちし侍なり
 (20) 日をかさね千こゑも、聲み、なれし
- (21) 法かとききは松かせそふく
 (22) うちのゝかたへいて、みるに、うちならへたりし
 (23) 市、かり屋、かたち一もなし、世の中に軒を
 (24) ならへ、かきをあらそひしたくひとても、わつ
 (25) かなるとしをへたつるほともあらず、家も
 (26) あるしもいつくしらすなむ成ゆくためし
 (27) のみ哀と、すへて三界むあんのことはりまで
 (28) あちきなくおほゆ、さるは色々さまゝくに
 (29) つくりすゑたりし馬うし鳥けた物、
 (30) そふして六道しんしやうの有様十かい
 (31) 一によとみしは、みな本かくの都に帰けるにや、
 (32) かたちもなし
 (33) さまゝくに市のかり屋のかたしるも
 (34) あとなき夢のおもかけそたつ
 (35) わきてたか形見とかみむふみからす
 (36) 草をなつ野にのうる道しは^(マ)
 (37) 夜もすから月みるとて、世になきいて
 (38) たちにてうちむれありきし人おほく、
 (39) はるかなる野邊もさとひ、にきはひつ
 (40) る心ちせしものこらす、今夜の月、いかはかり
 (41) さひしからむとおほえて

- (42) 野へにみしかりのさと人恋わひて
 (43) ひとりや月の霜にやとらむ
 (44) それよりたちかへるほとに、御堂のやねゑに、
 (45) 雀ともおほくひしめきたるを、けにいかなる契
 (46) にて、日をへて此鳥とも御きやうの聲をき、侍
 (47) けんと、まして人のかたちながら、いますこしこと
 (48) の心をもわきまゑしるは、いかはかりたのもしくて
 (49) こゝろなき軒のかはらのむらすゝめ
 (50) いかなるえにか法にあふらむ
 (51) 犬にひさこくわへさせてありく法師の、つな
 (52) しにくきかほも、けふはひとりえみのたね
 (53) と成て、このいぬのけちえむも、一世ならぬこと
 (54) にてこそ侍けめ
 (55) つかはるゝいぬのひさこものりのため
 (56) 菜つみ水くむためしとぞ見し
 (57) さても五十まで老ぬる身は、こむ年を待
 (58) へきにもあらず、けふをかきりにやと昨日覺
 (59) しに、五十てんくのくともおもひいたされて、
 (60) か様によみしにや
 (61) きくのりのすゑもたのもしかそふれば
 (62) 老ぬる年のいかにつたへて

- (63) たとひ又のとしの命ありとも、世にすみ
 (64) わひぬ雲水の身は、しらぬさかひにもやさすら
 (65) えんと、世にさためなくて
 (66) 老にけり世はすみわひぬとにかくに
 (67) さもあひかたきけふの暮かな
 (68) あけの玉かきも、けふは神さひて、まいる人も
 (69) みえず、なに、付てもかはり行心ちする、宮
 (70) のうち外の気色をみるにも、哀むかしと、い
 (71) つしかくち木のかけのみ恋しき心地する
 (72) けふぞ猶あゆみをはこふ人あらは
 (73) 神にまことの心みえまし
 (74) 法のむしろしきしのはるゝゆへ、し
 (75) るしつくるかたはらいたくこそ

四 解題

本稿冒頭で触れたように、『法のむしろ』は、正徹が北野松梅院の女性あてに送ったものである。同志社本は、本文一行目冒頭を採って、極札に「朝乃雲」と記され、他に表題らしきものはない。また、書陵部本には、前掲のごとく、「法のむしろ」が送られた前後の経緯が記されているが、同志社本は、『法のむしろ』

ろ』の内容のみで構成されている。卷子仕立てという点から見ても、あたかも正徹が女性に送った当時の文書がこれであると
言わんばかりの形態であり、正徹筆として伝えられてきたこと
も頷けよう。ちなみに、扶桑拾葉集所載本には、「法のむしろ」
という表題が明記され、正徹と女性との経緯も記されている。³⁾

同志社本は、全七十五行から成る。和歌は十首収められ、上
句・下句を分けた二行書きで、上句は行頭から一文字下げ、下
句はさらに一文字程度下げて記されている。和歌本文を行頭か
ら下げるといふ記載形式は、扶桑拾葉集所収本も同じである。
『法のむしろ』を、いわゆる歌集とは捉えず、詞書部分を主と見
る書写者の意識が垣間見える。⁴⁾和歌よりもむしろ、詞書に述べら
れた詠歌状況や感懐に、この作品の本質を見出したのであろう。
一方、書陵部本所載の「法のむしろ」は、あくまでも『草根集』
の一部分であり、当然のことながら、和歌は行頭から、詞書は
二文字下げで記されている。このように、同一の作品が、歌集
の一部として読まれる場合と、単独で読まれる場合とで、書写
者の意識が異なっている点に注意したい。

さて、肝心の同志社本の本文であるが、いま、書陵部本と扶
桑拾葉集所収本との異同を見てみよう。なお、特に問題のない
限り、同志社本と他二本との間の表記の異同は挙げず、意味の
違いに関する箇所のみを列挙する。行頭の数字は、翻刻に施し

た行数の通し番号、異同箇所の引用本文については、書陵部本
には(書)、扶桑拾葉集所収本には(扶)の略号を用いる。

- (3) いつれ―何か(扶)、あざきり―朝の霧(扶)
- (5) あとかたなき―跡かたなき(書)
- (7) たちこみたりし―たちこみたりつる(扶)、朝しも―朝霧
(書)
- (10) 今更―今更に(扶)
- (12) このきやう―此御経(書・扶)
- (13) おほえて―たのもしくおほえて(書・扶)
- (15) 森の木のはの―杜の木葉のみ(書・扶)
- (16) 松―杜(書・扶)
- (17) 冬かれ―冬かな(扶)
- (18) み、なれぬる―耳になれぬる(扶)、聲―こゑは(扶)、は
るに―遙に(書)はるかに(扶)
- (19) こ、ちし侍なり―心ちするは松かせにて侍る也(書・扶)
- (20) かさね―経つ、(扶)
- (22) みるに―みれば(書・扶)
- (23) かり屋かたち―かり屋のかたち(書・扶)、なし―なく(書)
- (24) たくひ―すみか(書・扶)、わかかなる―はつかなる(扶)
- (25) ほとも―ほとにも(書)

- (26) いくしらすなむーいつちともしらす（書・扶）
- (26) ためしのみ哀とーためしのみこそあれと（書・扶）
- (29) 馬うし鳥けた物ー人の姿馬牛鳥獸（書）人のすかた馬車鳥獸（扶）
- (30) 六道しんしやうー六道四生（書・扶）
- (33) さまぐくにーさまぐくの（書・扶）
- (35) ふみからすーふみならず（扶）
- (36) なつ野ー冬野（書・扶）、のうるーのこる（書・扶）
- (39) 野邊もさとひー野にもまとひ（扶）
- (40) 心ちせしもー心ちせしひとつも（書）心ちせしもー所も（扶）
- (42) 恋わひてーこひ（たちイ）わひて（扶）
- (44) やねるーやね（扶）
- (45) 雀ともーす、めの（書）す、め（扶）、ひしめきたるーひしめきあたる（書・扶）
- (46) き、侍けんとー聞侍りけん（扶）
- (48) いかはかりーいかはかりかと（書・扶）
- (53) 成てーなりぬるを（書）なりぬるに（扶）、ならぬことにてーならぬに（書・扶）
- (57) 五十一五十とせ（書）五十年（扶）
- (58) かきりにやーかきりにもや（書・扶）
- (60) よみしにやーよみしにやあらむ（扶）
- (63) 又のとしの命ありともー又のとし命ありとも（書）またとしの命有とても（扶）、すみわひぬーすみわひ（書・扶）
- (68) けふーけさ（書・扶）
- (69) みえすーなし（扶）
- (70) 気色をみるにもーけしきをみるにもきのふにはにす（書）けしきを見るにも昨日にも似す（扶）、いつしかーいつしかに（書・扶）
- (71) くち木のかけーくち木のやなきのかけ（書・扶）、心地するー心ちす（書）
- (74) 法のむしろしきー法のむしろのしき（書・扶）、しるしつくるーしるしつくるも（書）しるしつくも（扶）
- 三者の本文を比較すると、五十箇所余りの本文異同が見出される。このうち、同志社本のみに見られる独自異文は約半数にのぼる。しかも、
- (13) おほえてーたのもしくおほえて（書・扶）
- (19) こ、ちし侍なりー心ちするは松かせにて侍る也（書扶）
- といった例のように、他本にある語や文節がない箇所が見える。また、三者三様の異文を有する場合でも、

(29) 馬うし鳥けた物―人の姿馬牛鳥獸(書)人のすかた馬車鳥獸(扶)

(40) 心ちせしも―心ちせしひとつも(書)心ちせしも―所も(扶)

(70) 気色をみるにも―けしきをみるにもきのふにはにす(書)けしきを見るにも昨日にも似す(扶)

のように、他本がもつ傍線部分の要素を、同志社本のみ持たないという例もある。これらの例は、同志社本にない部分が後に補われたと考えるよりもむしろ、同志社本の脱落と見る方が穏当であろう。また、

(26) ためしのみ哀と―ためしのみこそあれと(書・扶)

という例は、係助詞「こそ」を見落とした上で、仮名表記の「あれ」を「あはれ」と誤解して、「哀」と漢字表記にした誤写と想定される。

(36) なつ野―冬野(書・扶)

という異同も、直前の「草」という語から、繁茂する「夏草」

を連想したための誤写であろうか。十月という詠歌時期を認識していれば、誤ることはまずない箇所であろう。さらに、

(71) くち木のかけ―くち木のやなぎのかけ(書・扶)

の異同箇所は、すでに『和歌文学大系』66が指摘するように、北野の読経結願にちなんで、次の道真詠を踏まえた表現であることが明白である。

柳を 菅贈太政大臣

みちのべのくち木の柳春くればあはれ昔と忍ばれぞする

『新古今和歌集』巻第十六雑歌上、一四四九番⁶

そうすると、この道真詠を読み手に想起させるためには、やはり「くち木のやなぎ」を明記しておく必要があるだろう。ここでも、同志社本の本文の乱れが指摘される。

五 おわりに

以上、考察してきたように、同志社本『法のむしろ』には、本文の傷が少なくなる。また、正徹自筆本とされる「永享九年正

徹詠草」(大東急記念文庫蔵⁷)の筆跡とも、いささか異なるようである⁸。同志社本『法のむしろ』は、やはり「伝正徹筆」であり、正徹自筆とは言い難いであろう。

正徹の詠草は、現代においても、新たな資料がたびたび発見・紹介されている。『新編私家集大成』を繙いてみると、「書籍版」(一九七四年刊行)では、先の「永享九年正徹詠草」(全一一六首)や「月草」(陽明文庫蔵)(全三二七首)が新資料として紹介されているし、その後、「書籍版補遺II」では、常徳寺蔵「正徹詠草」(全七八一首)が新たに見つかったという報告も加えられた。正徹ほどの歌人であつてみれば、詠草には枚挙に暇がなかつたであろうが、本稿で採り上げた「法のむしろ」歌群を有するのは、『新編私家集大成』を検するかぎり、本稿において本文校異に用いた書陵部本『草根集』(全一一三三七首)系統のみである⁹。「法のむしろ」が、正徹の私家集の一部分として収められたことは幸いとすべきだろうが、その一方で、本書のように、単独で書写され、読まれていたという点もまた、看過できないであろう。

『法のむしろ』が独立して享受されるとき、その和歌と詞書(詠歌状況)の書式は、歌を行頭から書く歌集のそれとは異なり、詞書よりも歌を字下げするという体裁を採る。そこに、詠歌状況を丹念に綴っていく『法のむしろ』のひとつの作品としての

完成度を認めることができよう。だがそれは、私家集収載歌の大半を題詠(結題)が占めるようになる、室町中期における私家集のあり方とは、一線を画するであろう。正徹の紀行文「なぐさみ草」と合綴された「法のむしろ」もあるという¹⁰。そこにはむしろ、歌僧、正徹の、散文作者としての側面がほの見えるように思われる。

附記

本稿は、「伝統文化形成に関する総合データベースの構築と平安朝文学の伝承と受容に関する研究」(同志社大学人文科学研究所第18期研究会第17研究、平成25〜27年度)における研究の一部である。

注

- (1) 以下、『草根集』(書陵部蔵五一〇・二八)本文の引用は『新編私家集大成』による。
- (2) 稲田利徳氏『正徹の研究 中世歌人研究』(笠間書院、昭和五三年三月)第五章第三節「法のむしろ」について、伊藤伸江氏・伊藤敬氏 和歌文学大系66『草根集・権大僧都心敬集 再昌』(明治書院、平成一七年四月)「草根集」解説、三四五頁。
- (3) ただし、扶桑拾葉集本の末尾「永享二年神無月廿日」云々の部分は、書陵部本に見えないという。稲田氏前掲書参照。
- (4) ちなみに、国文学研究資料館の日本古典籍総合目録データベースで「法のむしろ」を検索すると、「随筆」に分類されている。

(5) 四五頁脚注参照。

(6) 本文の引用は『新編国歌大観』に拠る。

(7) 『私家集大成』「正徹」〔書籍版解題〕(荒木尚氏・稲田利徳氏・井上宗雄氏他)に拠る。

(8) たとえば、「見」の字の筆跡は、次に挙げるように異なっている。



「永享九年正徹詠草」二十三丁裏四行目

同志社本『法のむしろ』三十五行目

(9) 『草根集』は日次本と類題本とに系統が分かれる(『新編国歌大観』「草根集」解題(赤羽淑氏・三村晃功氏他))という。本稿で用いた書陵部本は日次本である。一方、『新編国歌大観』所収の『草根集』(ノートルダム清心女子大学蔵本を底本とする)は類題本で、そこに「法のむしろ」は収載されない。

(10) 東京大学大学院人文社会系研究科文学部図書室所蔵の貴重本(東大国語時枝7A・4・L97233)。